

民主化闘争情報

No. 887
2013年10月3日
発行 日本鉄道労働組合連合会
(JR連合)

『週刊文春』が、JR総連・JR北海道労組(北鉄労)に関する記事を掲載したのは既報の通りだが(民主化闘争情報886号)、「革マル派浸透問題」についても詳しく言及している。

JR北海道社員の8割以上が「革マル系労組」所属 —『週刊文春』がJR総連への革マル派浸透問題に言及—

10月3日発売の『週刊文春』(10月10日号)は「新聞・テレビが報じない事故頻発の深層『JR北海道社員の8割以上が革マル系労組所属』」と題する記事で、一連のJR北海道の不祥事・事故の背後要因として、JR総連傘下の北鉄労における「革マル派浸透問題」にも触れ、その危険性を指摘している。

元委員長は革マル派の活動家

なぜ、北鉄労はここまで北労組を敵視するのか。その背景には、北鉄労が所属するJR総連と、北労組が所属するJR連合という上部団体の激しい対立がある。そして、この北鉄労の上部団体・JR総連を巡っては過去に度々、国会での警察庁警備局長答弁や政府答弁書などで、極左暴力集団である「革マル派」との関係が指摘されている。

〈全日本鉄道労働組合総連合会(注:JR総連)内には、影響力を行使し得る立場に革マル派活動家が相当浸透している〉(2010年5月11日付 政府答弁書)警察庁によると、革マル派は1963年に結成。「反帝・反スタ」を掲げて革命を目指し、現在も約43百人の同盟員を有しているとみられている。

70年代中盤まで中核派など他セクトと陰惨な内ゲバなどのテロ行為を繰り返していたが、近年は暴力性を隠して各界各層に浸透。お互いをペンネームで呼び合うなど極めて閉鎖性、秘匿性、排他性が強い集団だ。

その革マル派が最も浸透したのが旧国鉄時代に運転士らで構成された「動力車労働組合」(動労)。国鉄時代は少数組合だった動労は分割民営化に賛成することでJR発足後、多数派に転じ、その流れが前出のJR総連に引き継がれている。

公安当局によると、そのJR総連の傘下組織である北鉄労にも当然のことながら〈革マル派活動家が相当浸透している〉という。

「北鉄労の元委員長は『木暮』というペンネームを持つ革マル派の活動家。同じく『立花』というペンネームを持っていたJR総連の前委員長も北鉄労の出身だ。さらには北大革マル派出身で北鉄労のプロパー職員だった男は今、JR総連の特別執行委員に就いている」(公安当局関係者)

前出の社員はこう嘆く。「彼らのやっていることはまさに排他的な革マル派のセクト主義そのもの。世代間の技術の伝承どころか、同世代の社員同士のコミュニケーションも阻害されているのが実態です」

こうした排他的な体質を持つ北鉄労が、なぜ8割以上の高い組織率を誇っているのか。中堅幹部が語る。「北鉄労は新入社員の入社と同時に『ウチが一番大きな組合で皆入っている』『会社と一番仲がいい組合だから』と勧誘。何も知らない新人のほとんどは加入する。が、その新人が2、3年経って事情が分かったころにはもう手遅れ。脱退すればどんな目に遭うか皆、知っていますから。会社も組合から糾弾されるのが怖いから見て見ぬふりをしている」(中略)

一連の事実関係を確認するべく北鉄労に取材を申し込んだが、「答える気はない」と拒否。一方のJR北海道はこうコメントした。「労働組合の影響により、一連の不祥事が発生したとは考えておりません。会社として、そのような(北鉄労と革マル派との)関連は把握しておりません」(略)

JRに革マル派はいらない！ 私たち働く者の手でJR北海道の信頼を取り戻そう！